

「あを本」の青の色々

園田, 豊
北九州市立大学文学部教授

<https://doi.org/10.15017/9380>

出版情報 : 語文研究. 86/87, pp. 54-63, 1999-06-04. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

「あを本」の青の色々

1

現在の近世国文学史では、江戸の草双紙の名称の変遷をその表紙の色（行成表紙は模様）により、行成表紙・赤小本・赤本・黒本・青本・黄表紙の順に記述する。そして、赤本以前は明らかに子供向けの内容であったものが、青本、黒本と内容にやや大人味を加え、安永四年（一七七三）、恋川春町の『金々先生栄花夢』に至って、立派に（？）大人の絵草子となった（この事は、近世当時からそう言われていた。）ので、文学史では、この『金々先生』を以て文学史用語としての「黄表紙」第一作とするのである。しかし、当時の現状はそう截然とはいかなかったのは勿論である。

大田南畝を中心編まれたとされる黄表紙評判記『菊寿草』（安永十年刊）や『岡目八目』（天明二年刊）を読んでも、

近世当時は、

園 田 豊

ア、同一作品に青または黒の表紙をかけて販売することがあった。

イ、「青本」と「黄表紙」の称呼（ジャンル名）は、同一人により、同一作品に対してもその時々で自由に用いられるような場合もあり、人それぞれの様な所もあった。

ことが明らかとなる。

あと、もう一つ、従来から論じられながらも、今一つ明らかでないのが、青本の青と呼ばれている表紙の色と、現存している黄表紙の黄色表紙が、安永期前後から、同一色であるか否かということである。この問題について小考を加えたものが、この小稿となった。

先学引用されて既に久しいものだが、やはりこの問題について論じるのであれば、大田南畝『半日閑話』卷十三「安永五年丙申 正月」(岩波書店『大田南畝全集』第十一卷。三九六頁)の「鱗形屋双紙」の項の記事を引用しない訳にはいかない(それも二行割註の部分だけでなく、全文に互って)。

今年より鱗形屋草双紙の絵並びに表紙の標書共に風を變ず。表紙の上は例年青紙に題号をかき、赤き紙に絵をかきしが今年は紅繪摺にす。

〔二行割註〕すべて絵草紙、いにしへは唐紙表紙の金平本、又は土佐の上るり本なりしが、享保の頃より鱗形屋にて萌黄色表紙にて、今の鳥居流の絵をかへて、一種の風を變ず。是を青本と云。予が家に三冊蔵め置けり。そのうち萌黄變じて黄色の表紙となる。今黄色本を人なを青本と呼は是よりのゆへ也。その年の新板を黄色の表紙にして、その年過れば黒き表紙をさけて是をわかつ。是を黒本といふ。赤き表紙の赤本はむかしよりありと云(欄外。追考。去年夏か秋の頃絵草紙一冊出る。金々先生栄花夢と云名也。此絵草紙より風を變ず) 絵も鳥居風の絵を變じて、当世錦繪風の絵となす。表紙

の標書を紅摺にする事は、宝曆十庚辰年の春、通油丁丸小山九兵衛が家の草双紙、丈阿戯作の本を始とす。それより所々の草双紙の題号みな紅摺となりしが、鱗形屋には古風は失はず、人もまた是を見る事を愛せしが、今年古風を變ずる事いかゞ、今年新板の内高慢軒(齋)行脚日記といへる本行はる。(画工恋川春町作也)

この文章には、いくつか注が必要とならう。

①「今年」とは、当然、安永五年であらう。安永年刊の『金々先生栄花夢』の題号は青紙に、赤い紙に内容の一場面を描いているからである。この事は『金々先生』の現存本により、また、濱田義一郎氏『黄表紙題簽一覽』によって、南畝の言は裏付けられる。

②「紅摺」とは、二、三の色を使った色刷りである。

③萌黄色は、少し青味がかつた緑いろ。

④「絵をかへて」は、「かきて」の誤ではなからうか。

⑤「萌黄變じて黄色になる」の余談だが、筆者はこの逆の例を知っている。有斐閣『日本文学史』のカー表紙は黄土色がかった黄色であったが、西日の入る部屋の本棚に並べている内、褪色して萌黄色に變じてしまった。同様の経験をされた方もおられるのではないか。染料の相違か。

⑥この「風を變ず」は鳥居流から、当世錦繪へ風を變じた、の意である。

⑦この「今年」は安永五年。この条も、濱田氏『黄表紙題簽一覽』により裏付けられる。この頃、鱗形屋はすでに経営が傾き、老舗としての自信を喪失していたか。

続いて、『金曾木』(文化六年成)(岩波書店『大田南畝全集』第十卷所収の南畝自筆本による)の文章を引用しよう。

○むかしは絵草子を青本(二行割註↓黄色表紙なり。享保の頃の表紙、萌黄色なりし故に此名ある歟)黒本(ことしの新板を来年黒表紙にして出せり)赤本(丹表紙にて多くは一冊もの也)といひて、青本の価六文、黒本赤本は五文也(宝曆の比、予が稚かりし時也)近比まで青本の事を本屋仲間にて青く(とよびしが、此比前編後編の作出来てより、合巻物とよぶ。価も次第に高くなりて、小児のみるべきものにはあらず(欄外。文化十四年丁丑の暮より、合巻物外題の色ざりよろしきを禁ぜられて、合物やむ。もとの草双紙の如くなれども、半紙ざりにて、一冊十六文、つゝにうりて、絵もやはり合巻物のごとし)。

この文章にも少し注を付けてみる。

⑧一般の方の誤解なきように再述しておくが、江戸の絵草子

の表紙の色(行成表紙の場合は模様)による名称の変遷は、行成表紙本・赤本・黒本・青本・黄表紙の順に、現在文学史では、記述される。

⑨当然、値は少し安くなっている。

⑩何故、黄色の草子を「黄く」ではなく、「青く」と呼ぶのか。南畝もここに拘っており、それがこの二書の記述として残っているのである。

⑪現在のお金に換算して、百二十円位か。

さて、この青本と黄表紙の表紙の色目について、中村幸彦氏は、先述の南畝の二文章を引用され(『中村幸彦著述集』第四卷。五〇三頁)、

『金曾木』の記事について「黄色」も、日本に於ては昔から現代までむつかしい色である。南畝のいう処は、本屋仲間では「青く」と言っているが、実は黄色である。享保頃は萌黄色であったとまとまる。明晰な文章を書く南畝であるが、これでも以上三つの色の関係はよくわからぬ。

(『半日閑話』の記事について)この文章も、現代風の色彩感覚をもってすると明晰でないようである。しかし、この文章全体が、青本に関したもので、「黄表紙」なる分

類に関していないことは明らかである。とすれば、南畝が「黄色の表紙」「今の黄色本」と呼んでいるのは今我々が青本と称している原本の原表紙の色だとしておくと、簡単明瞭である。それを「青」と言い伝えたのは、享保頃に萌黄色の表紙があった（中村注、氏筆者は見たことはないが、↓園田注、褪色して黄色になってしまったのかもかもしれません）、草木の葉の色を「青い」とする日本人の感覚で、これを青本と呼んだ。後に、萌黄色表紙が、今の黄色表紙に替ったが、内容や形式が同系統なので、同じ称で呼んでいる。その理由が以上であると述べたものである。しかし南畝のこの二つの文章、又は口伝えで広まったこの説が、後々「黄表紙」なるものを論ずる時に持ち出されて、色々に理解されることになったようであるが、それは黄表紙の条で再説する。

とされ、その条では、
(前略) 以上の検討からして、安永四年以後は、青本と違つた「黄表紙」に変わった証は、一つも見出されず、残存する原本にもそうした相違はない。とすれば一つの色を青と見た人は青本といい、黄と見た人は黄表紙と称したと解するの外はない。
と結んでおられる。

また、中野三敏氏に、

（黄表紙「江戸生艶氣樺燒」初版本の）表紙の地色は黄色味の勝つた萌黄色であるが、これが「黄表紙」という名称のもとになったもの。ただし現存するものは、ほとんど褪色して黄色になってしまっているが、本来の色はもう少し青みがかつたものだったのではなからうかといわれ、そこから当時の「青本」という名称が生じたといわれる。しかし、より青みの強い表紙のものも現存しており、それはこの黄色い表紙とは明らかに別種の色調であつて、なおこの色目の問題は定説を見るにいたつては、
はいない。（『内なる江戸 近世再考』）

という御意見があるが、筆者は、安永四年以降の作品では、袋入りの作品でしか、青みの強い表紙を知らない（つまり、絵題簽の付された二冊物、三冊物で、その表紙のものをみたことはない）。ただ、「日本古典文学全集」（小学館）の『黄表紙／川柳／狂歌』の口絵写真では、東京都立中央図書館・加賀文庫蔵『嘘多鴈取帳』の表紙が、この青みの強い色をしている。しかし、これは原本の実際の色ではない。

さて、ここ迄、筆者は何を言わんとしているのであるか。結論的に言つて、筆者は享保期はいざ知らず、安永・天明当時「青本」と呼び習わされていた草双紙の表紙は、現在の文学史で「黄表紙」と総称されているものそれと同一のものであろう、とされる中村幸彦氏説に賛成なのであり、加える

べき説はない。ただ、筆者は兼ねてから中村氏の驥尾に付して、古くは高木好次氏「黄表紙の異称さまざま」に倣って「青本」や「黄表紙」の用例を少しく調べてきた。それらの用例を以下に示したいがための、前置き、従来までの研究概説が以上の文章であるが、やや長すぎるものとなってしまった。零細な用例であるが、早速以下に示そう。

3

では、『青本』の用例から、

○頭取 エヘン／＼是は御存じのも、太郎、日本一の黍団子、ひとつふたつの赤子の赤本、五つやみつの比よりも、音にきこへし老松の青本の色、ひわちやとうつろふ、十八大通のあまつ風・・・ (安永十年刊、大田南畝作『菊寿草』)

☆ (園田評。以下、☆は全て園田評である) これは最早有名な用例である。昔の (南畝の言を借りれば、享保頃の) 「青本」の表紙の青を「老松の青」(実際は緑色であろう) と形容した。それが安永十(＝天明元)年の時点では、鶯茶色に変わったという。鶯茶色は「緑みのにぶい黄」(緑味かかったにぶい黄色、の意) とある(『日本の伝統色』)。つまり、現在の黄表紙の色である。なお、後述するが、南畝は『菊寿草』の翌年の『岡目八目』のなかで、当節の草双紙の表紙を「色事でも

○春町さん打ちませう。祝うて三冊うりませう。近年袋入り斗おつとめゆへ、青本でハ久しぶり。

(天明二年刊、南畝作『岡目八目』)

☆これも有名な用例。「袋入」とは二冊物、三冊物の草双紙を一冊に合巻して色刷りの袋を掛けて売り出した、特製の高価本で三冊物の二・五倍程の値段であった。

○北野の開帳に湯島の湯の時宜、水になつて色のさめたる袋入をそめ直したる青本の仲間入・・・ (『同』)

☆「戯作外題鑑」天明四年の条に、「袋入の本此頃にて止む、是より後の袋入は其年青本の上本を先袋入にして出し、一月程立ちて直に青本にして出すことゝなれり」とある。このことを言っているのである。

○手前勝手の草紙のひやうばん、百二十八冊の惣巻軸、外題に見えしからくりの、夜分の景色引きかへて、げに青陽の春の青本・・・ (『同』)

☆青本の青を青空の色に故事つけて(？) いる。

○青本は、妹の行方いかゞと青くなり・・・等、十六例。(天明二年刊、山東京伝作『御存商売物』)

☆これも、青はブルーである。

○何某が句に、七重八重野辺の錦や桜草、そのことの葉の青本に花をさかせし七重八重・・・

(天明三年刊『楊柳桜草』南畝の跋文)

☆この「青」は葉緑色Ⅱ萌黄色にてもおかしからず。

○なま大通のなれのはて、我も青い知識から世に文書くことを広むなまけの馬乎人ともい、又はしミづのゑん十とも申やす。

(天明三年刊、志水燕十作『模聞雅話』)
☆この「青」は、青二才、青侍(『大鏡』)などの未熟をいう青に掛ける。

○右上下二冊は、門葉の婦人龜遊が作れる青本の清書双帯なるが・・・

(天明四年刊、朋誠堂喜三二作『龜遊書双帯』)
○へだてつる年、一枚絵・草双紙、明けつてめでたき空の青本。

(天明四年刊、朱棨漢江作『年始御礼帳』)
☆これも青空の青、すなわち、ブルーである。

○とうざい／＼たかふハございますけれど、これよりおことハリ申上ます。年々御らんにいれまする青本、御子様方の御意にかなない元日をお待ちかね・・・

(天明六年刊、古阿三蝶作『総角絵一印籠』)
○青本にかくれなき金／＼先生、青楼より戻りかけに四人のやうすを見て・・・

(天明六年刊、榎木雨露住作『四人詰律義一片』)
☆青楼とは勿論、遊廓のこと。古くより、唐で美女の住む美しい楼を「青楼」と称したので、この名がある。

○ひつじの春の新はん、青本をたのむ。

(天明七年刊、朋誠堂喜三二作『龜山人家妖』)

○先に人を笑はせたる青本の戯作者先生多くあり。

(寛政年刊、岸田杜芳作『武茶執行押強者』)
○さらば、返し授んと衣と子供の入替玉。青本二冊の通用物、どこぞに疵あらうもしれず・・・

(寛政三年刊、『今昔縁氣ノ白綾』芝全交序)
○はやす齋の青本表紙そろゆる草双紙。

(寛政四年刊、山東京伝作『桃太郎発端説』)
☆この「青」は、萌黄色の意味で使われている。

○青本之部

(寛政五年刊『臯下旬虫干曾我』仙鶴堂 癸丑新板目錄)
☆寛政五年にいたつても、まだ本屋にも「青本」の呼称

が用いられていたことを示す用例。
○まだ初舞台の御目見へに廻らぬ筆の操 狂言、青本好の御子さま方の御意にも叶ハッ・・・

(寛政六年刊、式亭三馬作『天道浮世出星操』)
○『角書』赤本昔俳優／＼青本新狂言 怪化競箱根戯場

(寛政八年刊、楽山人馬笑作)
○趣意をチヨツチヨト聞せば、唯筆頭と口先のまはるハ箆か、豆蔵平、朝から晩までワツチャクチャクヤ嘯 喙 喙 黄本の巢の中よりも引出し・・・

(寛政八年刊、『歌等功雀高名』宝倉主序)
☆「黄本」に「あをほん」とルビを振っている。

○青本は、糸からくりの幼 御子様方の御慰・・・

○寛政九年刊、『福徳壽五色眼鏡』桜川慈悲成序
 ○今や、青本の青おに、数度の桃太郎、寶物をわたせとゆふとも・
 (寛政十年刊)『文字鬼角文字』慈悲成序
 ○初日の空の青本に。あかねさす紅ずりの。外題を春の桜木に人は武士の名のみ残りて・
 (寛政十年刊)『武勇東錦絵』華家黒面序

☆この青はブルーである。
 ○柳の青本、緑撰取御好次第。

☆この青はグリーンである。
 (享和二年刊)『七福今年咄』永寿堂西村与八

○当年も相不替青本新作之儀被仰候所・
 (享和三年刊)『不厨庖即席料理』北斎
 ○両面摺と題号して。嚮に青一組の数に彫れり。

(享和三年刊、十返舎一九作)『裏面心拔路次』
 ○出方題にふつて振出す丹前の艶六法より、全体の横外方なる彼の青本の戯作も年々にて・
 (文化元年刊)『敵討情日傘』南袖笑楚満人序

○予五丁の青本をいまいあげた表紙付・
 (文化元年刊)『敵討春手枕』楚満人序

○本屋の店ぞさかんなる。常盤のいろと青本を。山のごとくつみおけバ。

(文化二年刊、山東京伝作)『荏土自慢名産杖』
 ☆これも「青本」と言いながら、実際は常盤色Ⅱ黄色表

紙を指している。

○こいねがはくハ、江戸気の皆さま。敵討のかたミ(園田注、「固み」をやめて。喜三三・春町伝来の青本にくだだけ給へと。おのが田へひく水かけろん。にくまれぐちなるながだんぎハしばらくやめて。まづ青本の聴衆一片の老婆心におつきなされませう。

(文化二年刊、式亭三馬作)『鬪訓歌字尽』
 ○大道廢れて仁義あり。大通廢つて野暮発る。頃日報警の青本行ハるゝ。赤本の宿昔といふとも是程にハあらじ。

(文化二年刊、式亭三馬作)『親警勝青葉』
 ○抑楚満人が夜学の功、山に里に殆ど三十年、青本作者の青大将と呼ばれしが・
 (文化二年刊)『敵討蟒蛇榎』鹿都部真顔序

○あおきひやうしのはしにもあらハもちゆる人もあるへけれどわらへのミることなし。
 (天明四年刊、市場通笑作)『正説河童咒』

☆「青黄表紙」などという呼称もあつたかと一瞬驚いたが、何のことはない。「青き表紙」であつた。

4

《「青表紙」の用例》

◇御こさまがた御なくさミとそんじ、くろじたてつうのミな

かミともふすしんきやうげん、しんまいさくしやのあをびやうしぼんにつまらぬみとながら、たゞよい／＼とのごけんぶつ。

(天明三年刊、豊里舟作『富多高慢噺』)

◇笞根からこつちに野暮と化物なしと鬼一口に是をせば、左氏乃青表紙も・・・

(天明八年刊、唐来参和作『模文画今怪談』)

☆「左氏」は『春秋左氏傳』を指す。「青表紙」は漢籍など内容の硬い本に付されることが多かった。

◇楚満人が青表紙を検見するに、其出処は慥ならねど、能く賢子の心を慰め忠孝の道をさとすと・・・

(文化二年刊、観扇亭作『三組盃初編』)

◇南柚笑楚満人、復仇の種を。孝行車に積で。世にとゞろかしてより。青表紙てふものは。なべて老実にぞなれりける。

(文政七年刊、『恋湊客入船』欣堂間人序) ☆本作は合巻である。

5

《黄色表紙》の用例

◎色事でも甘事でも、何でもこつちへ黄色表紙

(天明二年刊、大田南畝作『岡目八目』)

☆有名な用例である。本書で南畝は「青本」を「黄色表紙」と言う。「当今の青本の表紙は黄色だ」と教えてくれているよう。

6

《黄表紙》の用例

◆罷出たる者は、中橋と京橋のあたりに住、黄ひやうしの作者京伝と申ものでござる。

◆ひらいてミればきひやうしの目録左のことし。

◆鼠半切の漉かへしに摺。蜈蚣小判の黄表紙をかけ。

◆芝全交ハ曾て稗史小説を好ミけるが、去年の秋黄表紙の黄なる泉におもむきて・・・

(寛政元年刊、京伝作『花東頼朝公御入』)

(寛政五年刊、京伝作『花之笑七福参詣』)

(寛政六年刊『百人一首戯講釈』京伝跋) ☆これも有名な用例。『中村幸彦著述集』第十二巻にも引用されています。

これら四例はいずれも京伝の文章である。おそらく文学史上、「黄表紙」の語を、又それをジャンル名として初めて用いたのは勿論、意識的ではないとしても京伝では

なかるうか。

◆早野勘平が頭に若男のべつしをつかひ。定九郎が頭に小団七のうすにくなるを其まゝに。黄表紙の二幕とひねくりまはすこと左のごとし。

◆寛政八年刊『早野勘平若氣誤』十返舎一九序
ちやらり茶表紙に口拍子。出甕の黄表紙茶靡色。その茶ほうじや気ほうじに茶碗せ／＼茶わんせといふ。

◆あくで洗たたるまの眼も。ひらく黄紙の折端に硯の海のはしり書。
(寛政九年刊『庭莊子珍物茶話』曲亭馬琴序)

◆(寛政十二年刊『御手遊達磨心学』鈍々亭和樽序)
新玉の初商ひに。真咲掛けたる梅の赤本。鶯の黄表紙は。春風の袋入。

(享和二年刊『七福今年咄』永寿堂西村与八)
☆この「黄」は鶯色。
◆十返舎一九のあるじ野干仇討美談を狐色なる黄表紙に著し。

(享和三年刊『木賊杜野狐之復讐』清冷亭笑丸序)
☆この「黄」は、こんがりキツネ色。

◆諺に、色は思案の外と雖思案の中に悠然出た。浮気表紙の二趣向。外題の紅も恋仕掛。色に丸めし三冊も

(享和三年刊『色外題空黄表紙』一九序)

◆永寿堂の需にまかせ趣向は例の桃太郎が御仕着通りにそめ上げたる色ハ黄表紙模様は好の色外題。

◆(享和三年刊『初宝 鬼島臺』一九序)
宇治の花園、氏はなくとも。名を菜の花の黄表紙に。

◆(文化三年刊『大師河原撫子話』馬琴序)
天明時代の人魚の黄表紙此奴を一寸と斯う遣つて。 (明治二十六年刊『一夜漬人魚甘塩』)

7

《使用している本人が、わかっていない用例》
?爰に鳳雨なるもの、黄表紙の小冊を綴る。

☆本作は洒落本である。
(寛政十二年刊、『廓数可佳妓』序)
?こは黄表紙の種本なるを其儘に小冊となし。 (文化元年刊『教訓相撲取艸』一九序)

☆本作も洒落本である。

〈参考文献〉 Thanks. to

- 中村幸彦「草双紙の諸相」(『中村幸彦著述集』第四巻 中央公論社 昭和六十二年刊)
- 高木好次「黄表紙の異称さまざま」(『江戸時代文化』第三巻六号 昭和四年六月)

- ◎棚橋正博『黄表紙總覽(前・中・後・索引編)』〔日本書誌学大系〕(四十八)(青裳堂 昭和六十一年)〔平成七年刊〕
- 中野三敏『書誌学談義 江戸の板本』(岩波書店 平成七年刊)
- 山中共古著・中野三敏校訂『砂払―江戸小百科―(上)』(岩波書店 昭和六十二年刊)